

## コミュニケーションとしての感情表現 — 怒りを中心として

Peter Ackermann

三重大学人文学部国際交流事業・共同研究シンポジウム 「多文化時代とどう向き合うか」、  
2009年2月21日

異文化間コミュニケーション研究において、自文化と他文化の本質や特徴の対比を目的とするアプローチが目につく。その結果、A文化は個人の主張を重んじているのに対して、B文化では妥協と合意の方が大事であるというような、文化に関する固定したイメージを持つ人が少なくない。しかし、実際のコミュニケーションの「場」には、さまざまな性格の人、大きく異なった経歴を持つ人、いろいろな社会層や世代群に属する人がいる。したがって、コミュニケーションの相手が、たとえ自分と同じ文化に属していても、相手が自分に対してどのような言語・非言語行動を期待し、要求しているのかが分からず、戸惑うこともしばしばあるだろう。

ここでは、「ドイツ」「日本」といった大きな文化圏のコミュニケーション行動の本質や特徴より、一つの集団、社会層、地域、あるいは同じ教育制度と教育思想の枠内で同じ価値観を身につけた人からなる「小文化」の方に焦点を当てる。その中で特に感情表現のひとつである「怒り」とそれに関するルールをテーマとして取りあげたいと思う。

本論に入る前に述べておきたいことがある。一般に感情表現のルールを破ったとき、まわりから非難されることがあり、人はそれを恐れる。さらに人は自尊心を守るために周囲が期待している表現に合わせようとする。しかし現在の社会においては実際に期待される感情表現に合わせるということはどこまで可能なのだろうか。これは特に筆者が関心を寄せるところである。そこで、感情表現を形成する非常に複雑なメカニズムがどのように機能しているかについて考えてみたいと思う。

### コミュニケーションとしての怒り

「基本的感情」と定義できる感情は、人類のみならず哺乳類全体が有しているもので、主に恐れ、悲しみ、嫉妬、喜び、そして怒りといったものを指している。基本的感情の特徴は、突然に起こるもので、さらに曖昧さのない明白な感情であり、これは赤ん坊にも見受けられる。そして自分の体、たとえば目、心臓の鼓動、脈拍、体温などに影響がある。

そういった基本感情のひとつ、「怒り」をみると、特定の文化とは無関係に、「何かが急に上がってくる」「何かが立つ」「何かが爆発する」というような言い方が存在しているが、

この表現からも精神的なものと同体的なプロセスが絡み合っていることが分かる。しかし、こういった体全体に異常な緊張を感じさせる基本的感情を、ある特定の小文化の中で、いつ、どこで、どのように表現できるかということに関して厳しいルールがある。そのルールを承知して守ることはコミュニケーション能力の一番の前提になっているところに十分注意を払う必要がある。

そもそもコミュニケーション能力というものは、何かを表現するということだけを意味しているのではない。コミュニケーション能力は感情や考えを隠す能力でもあり、また、人の感情や考えを理解し正しく解釈する能力でもある。したがって怒りを表現するルールだけではなく、怒りを隠すテクニックや怒りを解釈するテクニックも視野に入れて考えていかなければならない。

これは数多くの研究で指摘されていることでもあるが、「怒り」というものはある行為の実行を暗示すると同時にその実行を抑えるためのメカニズムである。つまり「怒り」によって「あなたを殴るよ」という行為が暗示されるのだが、殴る行為そのものは抑えられるわけである。また、いわゆる「怒りの向きを変える」というメカニズムもある。これは相手を直接殴ることを避け、関係のないものを殴るという怒りのパターンである。いずれの場合も、相手を殴らないことになる。この結果から、心理学やコミュニケーション学の研究において、怒りそのものは「悪いこと」ではなく人間の自然感情であり、人間社会を安定する重要な役割を果たしている、といったことが指摘されている。「怒り」がなければ、お互いを殴りあうという結果にしかならず、激しい対立にあっては、ただの脅迫だけで済ませることができないだろう。

しかし、人間社会には「自然感情」だけではなく、「文化」というものも存在している。「文化」とは、教育学者のヴォルフガング・ズンケル (Wolfgang Sünkel) の定義によると、「生まれつきの遺情情報とは無関係に、社会化と教育による知識と知恵とその応用と伝承」によって形成されるものである (Sünkel 1997:197-198)。この定義にしたがうと、「文化」は自然感情がありのままの形で表現されないように機能するメカニズムでもあると理解できる。故に、文化的水準が高ければ高いほど、単なる「勝ち・負け」の結果のみしかもたらず、しかも暴力的行為を暗示する「怒り」というものがタブー化される。

原則として、社会の安定を守る役割を果たす「怒り」と、タブー化された「怒り」との間のバランスの取り方は、特定の小文化（地域、社会層、小集団など）の中で大人として生活するための大切な条件であるといえる。しかし、自分が属す小文化以外の社会とのコミュニケーションを成功させるには、同じバランスの取り方は不可欠であるといっても、それはけっして容易なことではない。なぜなら、人間社会が作る「文化」のために、表現化

とタブー化の間にある「怒り」は結果的に極めて曖昧なコミュニケーションをもたらすからである。しかしその一方、「怒り」には曖昧なところがあるにもかかわらず、その内容と原因をはっきり把握しなければ大いに後悔する恐れがある。こういったことを勘案すると、怒りのありようをつぶさに分析する意義があるといえる。

怒りという感情を表すには、無数の方法がある。ある小文化では、自分のアイデンティティーが認められなくなる恐れを感じた場合、相手を速いスピードで力強く理屈責めをする必要がある。また、無表情で皮肉を言ったり、痛烈に嘲笑したり、じっと人をにらんだりすることも怒りの表出方法である。あるいは、怒りという感情を全く表出してはいけない、という極端なケースも少なくない。筆者自身のことをいえば、若いときに「怒らないとあなたは弱虫とされてしまうぞ」と言われたことがしばしばあった。こういう考え方に影響されて、筆者はたいへん怒りっぽい性格になってしまった。

いずれにしても、小文化の中で通用する怒りの駆使と抑制、そして怒りの解釈には、言葉と同様に、訓練と経験が必要である。つまり人間の基本的感情は普遍的なものであるとはいっても、その表出については「文化」によって大きく異なっているということである。

人は自分の属する小文化から別の小文化に移動すると、慣れない表現パターンに気がつく。それに伴い、怒りの表現に由来する葛藤が増加する。たとえば、怒りを表さないと弱虫とみなされる恐れを感じる人が、怒りの表出が禁止された文化へ移動するとする。おそらく、その人は適応していくまでの期間は、程度の差こそあれ、ストレスに苛まれることになるだろう。

怒りの「向きを変える」というときも、小文化と個人差によってさまざまな慣習がある。たとえばキリスト教文化圏では、神の名を冒瀆するという習慣を挙げることができる。その昔、神の名を冒瀆する行為に対して、たいへん厳しい処罰がくだされた。それゆえに、神の名の冒瀆は「罰せられてもかまわないほど怒っている」というような意味として解釈できると思う。

仏教や道教をみると、身体の健康管理を特に重要視してきた面がある。これらの思想体系の強い影響を受けた社会では、怒りを完全に排除することは理想であり、それを遂行するテクニックも非常に発達している。それに対して、深い信仰心のある人は別だが、ヨーロッパ社会では人間の感情を完全に抑えることができないという考えが一般的であろう。そのために、地域と文化にもよるが、ある程度の怒りを表現することが許されているといえる。

また厳しい権威主義的な小文化では、怒りの向きを変えるための行為として目下の人に怒ったり、あるいは物を壊したりするなどのようなことがよく見受けられる。現在、ヨーロッパ社会で深刻な問題になってきた公共物の破壊（vandalism）も、多くの場合、怒りの表現として考えることができるだろう。

「怒り」の表現で、特に恐るべきものは「自己を責める」というものであろう。例として、社会の秩序が厳しい業績主義を基盤としている小文化を挙げることができる。そこでは、業績が上がらない人は罪意識を持ちやすい。しかも社会人としての「自己」を認めてもらう基準を満たしていないために、自分の苦しい気持ちを表出することは許されておらず、結局「自己を責める」ことしかできないというケースが少なくない。そして自己を責めるあまり、自己嫌悪に陥ったりし、鬱病に至るということが増えると、結果的に社会全体の活力の減退につながる可能性がある。そのため、こういった小文化では人にプレッシャーをかけるのを避けたり、業績があがるように丁寧に指導したりするなど、怒りを防ぐメカニズムも機能していることも多く、見逃せない点である。

### アイデンティティーとしての怒り

コミュニケーション能力を上げるためには、感情の適切な表出と解釈をマスターすることは不可欠である。しかし、上で述べたように、怒りの表現にはさまざまなタブーがつきまとい、小文化によっても異なる。人は自分の小文化の中で受けた教育と価値観によってタブーとされた感情表現を認識しているが、それを別の小文化の基準に合わせて適切に表出して解釈することはほとんど不可能である。その理由のひとつは、タブーを守るということは無意識のレベルでのことで、タブーは自分のアイデンティティーの一部であるためである。また同時に、自分がうけた教育の中でタブーとされたものを適切に応用する感覚がない。言い換えれば、怒りの表現方法というのは、自分自身と切り分けることができないものなのである。

ここでひとつの具体例を挙げよう。教養水準が高く、礼儀正しさが求められる環境で生まれ育った人は、さまざまな感情に対するタブーを守っているというケースが多い。そのため、「怒り」などの強い表現を忌避することは自分のアイデンティティーを確定し、同時に自分のステータスを知らせる手段にもなっているといえよう。しかし、一旦自分の小文化以外の人間の感情に直面すると、適切な反応のしかたが分からず、怒りの表現や度合いを調整できないということがしばしば起こる。こういったケースからいえば、「怒り」は自尊心が傷つけられたときに相手にそれを表現するために使われる感情でもあり、一方、人間が生まれ育った環境のルールやタブーによって形成された形でしか表現できない感情でも

ある。裏をかえせば別の環境に合わせて適切に表現するのが非常に難しいものなのである。

怒りは表出されるか否かとは別に、「自分」、つまり自分のアイデンティティーから切り離すことができないものである。また、「自分」が危険にさらされたときの緊張・恐れ・自己防衛によって勃発する感情でもあるといえよう。したがって、怒りの構成を理解するには、その人のアイデンティティーをなす自我像、自尊心、自己価値などの構成に注意を払う必要がある。

怒りを引き起こす一つの要素は、一人の個人である「自我」が孤立する恐れ、つまり傷つきやすい、弱い立場に押し込められる恐れであり、言いかえれば、自尊心が危険にさらされているときに自然に起きる反応が怒りであるといえるだろう。想像しやすい例をあげれば、AさんはBさんの行為に賛成できないときにBさんに注意しようとしたところ、Bさんは第三者のCさんとDさんを味方につけた。すると、孤立してしまったAさんは「負けた！」という気持ちになり、そこから生じてくる怒りを挙げるができる。また、我々がよく経験するはずであるが、学問や政治の世界での厳しい批判に対する怒りがあり、それを隠す難しさもある。

このようにして、怒りという現象は自分のアイデンティティーやステータスが問われるときに生じてしまうものであるといえるが、これは衣食住と同様に、精神的・社会的安定のために欠落してはならないものである。しかし、人間のアイデンティティーやステータスをなすものは、個々の小文化とその構造や宗教、伝統、歴史などによって異なっている。その結果、怒りが勃発する原因、つまり自尊心が傷つけられる原因は、個々の小文化によって多少違う。

二つの対照的な例を挙げることにする。A小文化では、周りの人がどのぐらいやってくれるかによってステータスの認識、ひいては自我像が大きく左右される。卑近なケースをあげるならば、飲み物を出してもらったり、座るときに椅子をひいてもらったりというような扱いを受けることがステータスとして認識される。それに対して、B小文化は、人にやってもらうのではなく、何でも自分一人でやるのが好まれるパターンである。この場合、主に相手から受ける信頼、やや大仰にいうと相手から権限のようなものを委譲されているかたちである。これによってステータスの認識がきめられるのである。

また、宗教の影響という点から見てみると、小文化と小文化の間で道徳や自己価値を設定する基準が大きく異なることがある。ヨーロッパを例として挙げるならば、ある地域では宗教儀礼の参加によって自己価値を設定する伝統がある。別の地域では行いによる自己価値を設定する伝統が支配的である。それら2つの間隙を埋めることはほとんど不可能であ

ろう。

両者の違いについて「怒り」の側面からいえば、宗教儀礼への参加による自己価値設定の場合、「宗教の場」である教会とその組織と権威に対して罪意識ができやすく、そこに葛藤を感じていれば腹が立つことがある。一方、行いによる自己価値設定の場合、その行いが、誰によってであろうとも、阻止されていれば腹が立つ。このように対立的な怒りのパターンが存在している。

それからキリスト教のような一神教ではない、仏教や道教のような思想体系の場合はどうだろうか。仏教や道教では万物の活力を保證するエネルギー（気）とその流れが極めて重要視されている。たとえば日本語には病氣、元氣、天氣など「気」のついた言葉があるが、とりわけ「氣遣う」「気に食わない」「気のおけない」「氣安い」などの言葉をみると対人関係におけるエネルギー（気）のありようを示しているといえる。

このような社会に生きている人にとって、個人と教会、または個人と天主との関係よりもエネルギーの流れを可能にする万物のつながり、つまり万物からなる「輪」が最も大事だといえるだろう。したがって、自己価値の認識は、自分がその「輪」の存続を保證するエネルギー（気）の流れにどのぐらい貢献できるかによるものである。そのプロセスに何らかの邪魔が感じられる場合、さまざまな心配が募り、腹が立つ。

ひるがえって、自尊心は自分が生まれ育った小文化の価値観によるものであるため、自尊心が傷つけられる原因とそれに対する反応は小文化ごとに特徴があるといえる。さらに見逃してはならないのは、年齢別や性別の怒り方もあるということである。年齢が上がることによって、人に頼りたくなるということもあれば、自分が抱いてきた理想と現実との矛盾を認識することもある。いずれの場合にも、「自分」の弱いところを感じ、その埋め合わせとして怒りの感情を表出することがある。

さらに、自尊心に決定的な影響を与えるのが「性」であろう。男（または女）として、父親（または母親）としての自分をどのように認識するかによって感情表現が異なり、当然のことながら、自分のアイデンティティーに関する「信号」として発せられる言動も異なる。このような言動が相手の解釈によって誤解あるいは否定された場合、肯定的な自我像を維持できなくなる危険にさらされる。そこでの興奮による怒りの激しいことは周知の事実である。

そもそも「性」のアイデンティティーに関する怒りのパターンも基本感情のひとつで、哺乳類に共通している極めて基礎的なものである。ところが小文化によって「性」の解釈は

さまざまである。その結果、ある文化では、いわゆる「男のプライド・女のプライド」に起因する怒りが目立つのに対して、別のある文化では、このようなケースは比較的に少ない。

このようにして、怒りは自尊心と密接な関係にあり、自尊心が傷ついたことを相手に知らせる普遍的な感情であるといえよう。ただし、自尊心そのものは、文化的価値観と、それを醸成する自己価値によるもので、国、地域、社会層、家族、あるいは性別や年齢層などによっていろいろなパターンを持つことができる。また、怒りという普遍的な感情は無数のタブーによって抑制され、多種多様のメカニズムによってその表現は曖昧になったり、その向きが変わったりする、ということをごここでさらに強調しておきたい。

## 多文化時代と怒り

現在の多文化時代において、生まれ育った小文化で身につけた感情表現能力と感情解釈能力だけでは激変する社会が必要とするコミュニケーションは成り立たない。それにもかかわらず、感情とその表現というものは、辞書を引きながら語彙や文法を覚え、応用力をつけていくといったように勤勉に勉強して暗記できるものではない。

A 文化の人間が B 文化の人間に出会ったとき相手の自尊心について知識を持ちその怒り表現の理論上の理解はできるかもしれないが、複数の文化と言語圏で教育や経験を受けた人になると、自尊心や感情表現の構成が複雑である。そして、そのような人はどんな社会においても適切な感情表現能力と感情解釈能力を発揮できない場合が多い。こういった事実は十分認識すべきである。具体的な例を考えると、「怒り」を表したいときに躊躇してしまい、怒りを表現する機会を逸する。あるいは、誰かが怒って皮肉を言ったにも関わらず、それを見抜くことができずに誤解が生じたということもあるだろう。ほかにも、怒って大声で怒鳴ったときに周りがただ沈黙したために、結局自分が伝えようとする問題が無視されてしまったケースや、怒りの向きを変えて読んでいた新聞などを突然破ってしまったところ、周りはその行為の意味が理解できず、自分はただ頭がおかしいと思われたといった例が挙げられる。

もちろん、怒りの表出は個々人独自の性質と気質によっても異なる。それにしても、怒りはコミュニケーションのひとつであることからいえば、相手に全く理解されないような基準はずれの表現をしないことは常識のように思われている。ところが別の文化的背景を持つ人の場合、怒りというコミュニケーション・パターンが通用しない可能性が高いのである。

さらに多様な文化的背景を持つ人に注意を向けると、このグループに入る人は独自の感情表現のミックスのためにコミュニケーションを遂行するのに大変苦勞している。こういう状態の人に対して、複数の文化的背景がもたらす心境が分からない人は「郷に入っては郷に従え」という諺をアドバイスのつもりで言うかもしれない。しかし、多様な文化的背景を持つ人の苦勞の前では無意味で、問題の解決にも不適切ですらある。そのため実に残酷に聞こえてしまう。

この論考の結びとして、現在のいわゆる「多文化時代」における「コミュニケーションとしての感情表現(特に怒りの表現)」に関して次の4点を強調したいと思う。

1. 怒りというものは人類が共有している感情で、原則としてなくてはならないコミュニケーション法でもある。そして怒りは表情をもって不満を相手に知らせると同時に、その不満のための腕力的行為を抑制している、ということを表すコミュニケーション機能を果たしている。

2. 怒りはアイデンティティーとステータスが維持できない、弱い立場に対する恐れを表し、そうならないための予防措置であるといえよう。同じ小文化の内部では、怒りの表現に対する怒りの解釈が適切であり、同時に怒りを勃発させないための文化的メカニズムも効率的に機能している。しかし、多文化時代において、相手のアイデンティティーとステータスをはじめ、相手のコミュニケーション・パターンによる怒りの抑制メカニズムについてもっと知る必要があり、さまざまな問題や苦勞について認識を深める必要もある。

3. 怒りに関して数多くのタブーが複雑な形で機能している。たとえば、怒りの表現、怒りの向き、怒りの防止、怒りの隠し方などにおいてたくさんのルールがあり、外部の人にとってそのルールを把握することは極めて困難である。とりわけ、怒りという現象は明白な面 (overt な面) と人目につかない面 (covert な面) を有しているので、多文化時代というのは、その複雑な表現について一層研究を深めていかねばならない時代であるといえよう。

4. 多文化時代とは、単純に自国に外国人が増え、外国に自国の人が大勢で出かけていくということだけを指しているのではなく、複数の感情表現の意義とルールを習得した人の数が増えていくという時代であると指摘できる。したがって、いくつもの小文化独自の自我像、自己価値や自尊心の影響を受けたために、怒りのような基本的感情をどのようにして適切に表現できるか、解釈できるかが分からない人の数が増えつつある時代である。



## 参考文献

von Engelhardt, Michael (2006): „Biographie und Narration: Zur Transkulturalität von Leben und Erzählen“. In: Michael Göhlich, Hans-Walter Leonhard, Eckart Liebau und Jörg Zirfas (Hrsg.): *Transkulturalität und Pädagogik. Interdisziplinäre Annäherungen an ein kulturwissenschaftliches Konzept und seine pädagogische Relevanz*. Weinheim und München (Juventa), pp.95-120.

Lelord, François und André, Christophe (2008): *Die Macht der Emotionen*. München (Piper). (*La Force des Émotions*. Paris (Odile Jacob), 2001).

Potter-Efron, Ron and Pat (2006): *Que dit votre colère?* Paris (Eyrolles). Traduit par Larry Cohen et Brigitte Vadé. (Original 1995: *Letting Go of Anger*).

Schneider, Hans Julius (2008): "Spiritualität ohne Gegenstand. Der Buddhismus als eine nicht-theistische Religion". In: Schneider, Hans Julius: *Religion*. Berlin (de Gruyter), pp.99-136.

Sünkel, Wolfgang (1997): "Generation als pädagogischer Begriff". In: Liebau, Eckart (ed.): *Das Generationenverhältnis*. Juventa (Weinheim, München), pp.195-204.